
悲劇の神妻

苦部鏡華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悲劇の神妻

【Nコード】

N5520D

【作者名】

苦部鏡華

【あらすじ】

もうすぐ19歳になる多島奈緒^{たじまなお}は幼い頃に両親を亡くし、施設で暮らしていた。高校卒業と同時に施設を出て、母の故郷である振嶺^{ふるみね}市に引っ越してきた彼女が、バイト先の喫茶店で出会った青年、馨^{かおる}に惹かれ始める中、振嶺市では殺人事件が頻発していた——振嶺という地名に関わる伝説と凶悪な殺人事件の奇妙なつながりに気付く奈緒。そして、彼女自身もまた……。

序章

この地に伝わる伝説のひとつに、松浦佐用姫まつうらさようひめの話がある。

＊＊＊

昔々のお話。

この地にはとても仲のよい男女がおりました。男の名は**大伴狭手彦**おおとものさでひこ、女は松浦佐用姫と呼ばれておりました。互いに深く愛し合い、将来は契りを交わそうと決めた仲でございました。

ところが、ある日。

狭手彦はここからとても遠い地へと向かうことになり、佐用姫と離れ離れになってしまうのでございます。

佐用姫は愛する狭手彦を、高い山に登って姿が見えなくなる遠くの彼方まで見送ったのでございました。狭手彦からも己の姿が見えるようにと、佐用姫は右手を高々と上げていつまでも振り続けたのでございました。

狭手彦と別れた五日後、狭手彦と瓜二つの男が毎夜佐用姫のもとに通ってくるようになりました。

はじめは、ここにいるはずのない狭手彦の姿を不気味に感じていた佐用姫でしたが、しばらくすると愛する人がいない寂しさからか、

恐怖より愛しいという気持ちが募ってきたのでございました。

佐用姫は、狭手彦を恋い焦がれる己の想いが幻を見せているのだと思うようになりました。

佐用姫の侍女は己が仕える主人の部屋から、夜な夜な男の声がすることに気づいておりました。

ある夜、侍女は主人の部屋の中を盗み見しました。そして、主人の隣にはいるはずのない狭手彦の姿を見つけたのでございます。

その姿はほのかに光り輝いておりました。

翌朝、侍女は左用姫に「あれは物の怪の類でございます。もうお近づきにならないでくださいまし」と、訴えたのでございます。

佐用姫は、それに笑みを返すだけでございました。

しかし、物の怪でございます、と何度も侍女に言われる内に、佐用姫は疑問を抱いたのでございます——あれは夜が明けるとどこへ行くのか、日が沈むとどこから来るのか。

そして、佐用姫は幻の正体を突きとめようと、麻糸を幻の狭手彦の着物の裾に結びつけたのでございます。

翌朝、侍女がその糸を追っていくと、以前に佐用姫が登った高い山の近くにある、大きな沼にたどり着きました。

そこには、体は人間で頭は蛇の生き物がいたのでございます。

侍女が急いで佐用姫のもとに帰ると、姫の姿が見あたりません。

侍女は泣きながら佐用姫の両親に知らせ、その沼に人々を集めますが、すでに何者の姿もなく、やがて沼の底に佐用姫と思しき人の冷たい体が見つかったのでございました。

そのひと月後、帰ってきた狭手彦は愛する佐用姫の最後を知らされ、嘆き悲しんだのでございます。

そして、誰にもなにも告げずに姿を消してしまったのでございました。

それとほぼ同じとき、左用姫の哀れな姿が見つかった、あの沼の近くの高い山の頂に、日沈とともに葉を生い茂らせ、夜明け前にはその葉をすべて舞い散らせてしまうという不思議な大木があらわれたのでございます。今まで姿かたちもなかったその場所は、左用姫が愛する狭手彦を見送ったその場所のでございました。

毎夜毎夜、葉を降り散らせる姿は、まるで絶えまない嘆きの滴のようだと、その大木は狭手樹かていと名づけられたのでございました。

これは悲劇の男女として有名な話だ。

話の結末で語られる狭手樹は実在している。伝説のような奇怪な現象はないものの、この地の霊山の頂上で御神木として祀られている。

知る者は少ないが、この伝説は『悲劇の神妻』かむつまとも呼ばれていた

!

第一章

午前8時。

《ジリリリリリ——》

頭の上のほうで甲高い音がする。

奈緒は無意識に左手を伸ばして、ベッド脇にある小さなテーブルの上を探った。目当てのものはすぐに見つかり、それを勢いよく叩く。

目覚まし時計の耳障りな音が止むと、奈緒は左手を引き戻して布団にくるまった。

——数分後。

布団の中で、もぞもぞ動いていた塊はゆっくりと体を起こす。

その拍子にさらりと揺れた黒髪は肩下までの長さで、それに縁取られる頬はほっそりしている。つんとした小さな鼻は意志の強そうなまっすぐな眉に繋がっていて、ややふっくらと厚みがある唇は薄紅色。眠たげにこする目は少し大きめのつり目だ。

「うう、………」

まだぼんやりとする頭を右に左にと揺らしながら、奈緒は朝の訪れを告げた。

「…………おはよう」

一人暮らしの彼女に、声は返らない——。

今年19歳になる多島奈緒は、個人経営の小さな喫茶店「朴の木」で働いている。

オーナーの山口幸三の妻、希美子と奈緒が暮らしていた施設の院長が学生時代の同窓だったことがきっかけで、ちょうどパートの主婦が辞めて人手不足になっていたこの喫茶店で働くことが決まったのだ。

自宅を改装して一階を店舗に、二階を住居にした店内はこぢんまりとしている。

四人掛けのボックス席が窓際に二個、通路を挟んで三個、壁際に二人掛けのボックス席が二個、椅子が五つカウンター前に並んでいる。

落ち着いた雰囲気作りのため、茶色を基調とした内装だ。

午後3時20分。

《カラン、カラン——》

鐘の音で客の来店に気づいた奈緒は、グラスを拭く手を止めて面を上げた。

「あっ」

奈緒は目を僅かに見開いてから、たった今入ってきた人物に呆れ気味の笑顔を向けた。

「いらっしゃい——」かおる馨って案外、暇人なんだね」

「うわっ。客に向かってなんだその言い方。もっと歓迎しろよ——
てか、暇人じゃなくて常連って言え」

そう言いながら、馨と呼ばれた21、2歳ぐらいの青年は奈緒の目の前のカウンター席に座る。そこは、三週間前から毎日訪れるようになった彼の指定席だ。

「一人？」

辺りを見渡して、馨は尋ねた。

「うん。30分前に最後のお客さんが帰ったし、幸三さんと希美子さんは買い出しに行ってる——どうぞ」

「お。わりい」

冷蔵庫で冷やしていたグラスに水を注いで手渡すと、馨はぐいっ
と一口で飲み干した。

グラスを返してジーンズのポケットから煙草を取り出そうと下を
向く端正な顔立ちを、奈緒はぼんやりと眺めた。

短めに刈られた茶色混じりの黒髪は、彼の繊細な顎の輪郭を際立
たせている。スッと伸びる高い鼻、涼しげな瞳の下に影を作る長い
睫毛。
まっげ。

しかし、切れ長の瞳に時折浮かぶ独特な雰囲気には、どこか近寄
りがたい鋭さを感じさせる。

「——なに？」

「いや、なんでも」

視線に気づいて訝しげな表情を浮かべる馨に適当に返事をして、
奈緒はくるりと後ろを向いた。

「——ふうん」

彼女の様子をさして追及しようとはせずに、馨は煙草に火をつけ
る。

「いつものでいいんでしょ？」

奈緒は背を向けたまま尋ねた。返事を待たずにカップを用意して、
手早く紅茶を注ぐ。特注のカップは白色で、持ち手が緩く波打って
いた。下の方に小さく描かれた緑色の楕円形の絵は、店の名前でも

ある朴の木の葉をモチーフにしている。

「はい」

目の前にカップを置くと、馨は煙草の煙を奈緒に向かって吹きつけた。

「ふう————どうも」

「わざとでしょ……」

半眼になって睨みつける奈緒に、馨は真面目に言い放つ。

「当たり前だろっ——」

言った次の瞬間、声を上げて笑った。

「……………」

目の前のからかい好きな笑顔を見つめる奈緒の唇から、重いため息が漏れた。

第一章（後書き）

私の未熟な文章を読んでくださる皆様、本当にありがとうございます。大体の流れは決まっているのですが、表現力の無さからなかなか執筆が進みません（泣）。投稿が遅いと思いますが、皆様のアクセスを励みに頑張っていきたいと思えます。

第一章 2

午後9時。

自宅――。

青白い明かりに照らされながら、奈緒はへたり込むように座っていた。

時折、外を走る車のヘッドライトがカーテン越しに光の筋を差し込み、電気をつけていない部屋で怪しく揺らめく。

その暗がりの中、いつもベッドのサイドテーブルに置いてある写真立てを握りしめながら、奈緒は今にも泣き出しそうな、張りつめた表情で青白い光の源を凝視^{みなもと}していた。

奈緒の眼前で唯一の光を放っているのは、一台のテレビ――。

青色のライトがぼうつと照らす薄暗いスタジオの様子と、そこに浮かび上がる十数体もの人間のシルエットが画面に映し出されていた。

『全国に衝撃を与える”振嶺市連続殺人事件”。未だ犯人は捕まっておらず、振嶺市民は2月から続く怖い犯罪に日ごと恐怖と怒りを募らせています。今回我々は、今までの被害を振り返り、未知なる犯人像を探っていききたいと――』

画面にアップで映る番組キャスターはそう切り出して、居並ぶ出演者たちを一人ずつ紹介していった。

”振嶺市連続殺人事件”

被害者のほとんどが若い女性で、たった二ヶ月で10人以上もの犠牲者を出している凶悪事件だ。

尋常でない早さで増える死体、見るも無残な姿での発見。
舞台となっている振嶺市の住民はその凶行に、震え上がっていた。

テレビが映し出すのは、振嶺市連続殺人事件に関する特別番組だ。
『最初の犠牲者と思われるのは、市内で占いの館を営んでいた51歳の男性で――』

キャスターが重苦しい声で話し始めた。画面右上には《残虐な犯行、被害者の接点は！？》という文字が出ている。

『――当初、捜査対象ではありませんでしたが、最近になって事件の最初の犠牲者だと捜査本部が公表しました。右腕はもぎ取られていませんでしたが、体に残っていた何十カ所にも及ぶ刺し傷が他の被害者と同じのものと判明したのが決め手です――』

その後、30分程かけて被害者11人に関する映像が流れた。

奈緒はじっとそれを見続けた。

映像あけすぐのコマーシャルが終わると、番組冒頭に見たスタジオではなく、幾重ものライトに照らされて暗闇の中にぼんやり浮かぶ建物のシルエットとその周りで動きたくさんの人影――それらの前に立つ、真剣な面持ちのレポーターが映った。

（生中継……？）

『私は今、振嶺市^{ふるみねし}川杉町^{かわすぎまち}のとあるアパート前に来ています』

川杉町は奈緒の部屋からそんなに離れていない。行ったことはないが車で大体30分といった所だろう、と奈緒は思った。

注意を引かれ、画面下のボタンで音声のボリュームを上げた。緊張気味の若いレポーターの声が部屋の中に響く。

『2日前にここから約1キロ離れた河原で発見された遺体が、松永伊織さん21歳のものと断定されました。伊織さんは不動産会社勤務の派遣社員で、こちらのアパートで一人暮らしをしていました。今回も右腕がもぎ取られていて――』

（河原……）

奈緒は瞬きもせずにテレビの画面を凝視した。いつの間にか身を乗り出して、それを支える右手と胸元で写真立てを握りしめる左手は微かに震えている。

『――伊織さんも今までの被害者と同様、遺体が発見される数日前から部屋に引きこもる生活をしていたそうです。夜中、部屋の中から男の笑い声のようなものが聞こえた、というマンションの住民の証言もあり、警察では事件解決の重要な手がかりとして他の事件との関連性を調べている模様です』

奈緒は、きゅっと唇を噛んだ。

(……声だけじゃ……)

男の声の存在は数件前から重要視されていた。

七件目の被害者が発見されたとき、警察が開いた記者会見で話をした捜査官は、怒りを隠そうともせず語気を荒げていた。その姿は迫力があり、多くの人間に希望を与えたのだった。

しかし、捜査はなかなか進展せず、被害者は増え続けた。

今では、手がかりを活用しきれない警察の無能さを伝える特別番組が高視聴率をマークしていた。

『――どう思われますか？』

いつの間にか俯いていた奈緒は、キャスターの声で我に返った。

顔を上げると画面がスタジオに戻っている。警察への辛辣な批評で人気のコメンテーターがアップで映し出された。

『警察がいつまでもこのように残忍な犯人を野放しにしているのは、我々は安心して生活ができませんよっ。昨今、捜査技術が向上したと言われているのに、このようなことでは役立たずと――』

『その言い方は何だ?! 警察は全力を尽くしているんだ……ただ、犯人が念入りに行動しているから手がかりが少なすぎて――』

『手がかりが少ないなどは、ただの言い訳でしょう——』

割って入った警察関係者を皮切りに、他の出演者たちも次々自分の意見を怒鳴り始めた。——怒鳴らなければ声がかき消されてしまうほど、その場は騒然となっている。

『お静かに——』

喧噪の中、キャスターは一人の著名人を名指しした。

今まで押し黙っていたその人物——犯罪心理学について数多くの研究本を出版していて、何冊かはベストセラーにもなった作家だ——は、軽く咳払いをした。

キャスターの声とその咳払いに、他の出演者たちは口を閉じて作家を見る。

『犯人に関してですが——』

作家が低く唸った。

『殺人の動機が分かりませんね。一人目の犠牲者とされた男性は除いて……なぜ若い女性ばかりを狙うのか。何の接点もない12人が狙われたのはなぜか。鋭利な刃物で体中をメッタ刺しにし、”右腕をもぎ取る”のはなぜなのか——』

作家は『右腕を——』の部分に、ことさら力を込めて話し続けた。『その”何故”が分からなければ、犯人を指す”誰”も分からないわけですよ——まあ、無作為に相手を決めて殺人を犯しているのなら……そのふたつから犯人を特定することは難しいですがね……』

作家の重苦しい声に頷く出演者たちの姿が映し出された。

衝突する彼らでも、作家が言ったことに関しては同じ意見なのだ。

「”何故”……”誰”……」

ぼつりとこぼして、奈緒は手元に目を落とした。——写真立てには、幼い少女とその両親と思しき若い男女の一枚の写真が嵌め込まれている。

「パパ、ママ——」

奈緒は、大事そうに写真立てを抱きしめた。

第一章 3

翌日――。

《ザアアア――》

絶え間ない音をぼんやり聞きながら、奈緒は薄暗い部屋の中で目を覚ました。

「……夜？」

ぼやけた視界に入る室内の暗さに奈緒は一瞬、週に二回の休日のひとつを寝潰したのかと落胆した――が、それにしても長時間睡眠のときの体の疲労感がない。

ちらりと横目でサイドテーブルの目覚まし時計を確認すると、針は1時20分近くを指していた。

「夜中――ならもっと暗いよね」

のっそり起き上がって布団を剥いだ奈緒は、室内に漂う湿気と冷気で体をかすかに震わせた。同時に、外から響いてくる音の正体に気づいた。

「雨降ってる」

奈緒はベッド脇のカーテンを開いた。道路に面した大きめの窓は、いつもなら陽光の入り口なのだが、今日は灰色の分厚い雲とそこから降りしきる無数の雫が見える。

「太陽が見えない……」

昨夜湧き上がった辛苦しんくを晴らしてくれのような快晴を望んでいた奈緒は、思わず、ため息を漏らした。

午後3時45分。

雨降りにも関わらず、近所のスーパーはごった返していた。

人混みの中を縫うように歩いて、奈緒は商品をかごに入れていく。畳んでいてもやはり邪魔に感じてしまう傘と、それから垂れる水滴で濡れてしまった床は少しの移動さえも困難にしていた。そこかしこで、足を滑らせて転ぶ人間を目にする。

それでもなんとか買う物を揃えて、奈緒はレジに向かった。

どの列もずらりと買い物が並んでいるため、早さの違いはほとんどない。――奈緒は自分から一番近い、三組の客が並んでいる列に加わった。

なんとなく周りを見回して、彼女はふと、思う。――このありふれた風景に、殺人を繰り返す異常な殺人鬼が潜んでいるのかもしれない。

菓子コーナーの陳列棚に近寄る父親らしき子連れの中年男。インスタントラーメンを買い込む二十代らしきスーツ姿の男。週刊誌を持って四、五人で固まって騒いでいる若者たち――。

(……………)

視界に入るどれもが、残虐な殺人を繰り返す人間には見えなかった。

だが――。

周囲から怪しまれない人物だからこそ、犯人は逃げ延びているのだろう。

奈緒は、ずっと目を細める。

(どっかにいるんだ。絶対に――)

他人を手につけ、何食わぬ顔で平穏な日常に戻る。自身の犯行に

気づかない世間の姿を見て、密かにほくそ笑む殺人鬼――。

（きつと振嶺市に……）

「きゃっ」

背後で上がったかすかな声に、奈緒の思考は中断された。

何事かと振り返りかけて、奈緒は突然背中にもぶつかってきた何かで体勢を崩した。

「う――わっ」

思わず、膝をつく。咄嗟に放してしまったかごは大きな音を立てて落ち、中身が飛び散った。

「ご、ごめんなさい」

慌てたように言う上擦った声が耳に届く。振り向くと、スーツ姿の若い女――二十代前半くらいだろう――が腕を伸ばしていた。足元を見ると、滑ったような奇妙な水跡がある。

（ぶつかったんだ）

「すいません、ありがとうございます」

奈緒は差し出された手を素直に掴んで立ち上がった。

「ごめんなさい。服汚れてない……？」

「大丈夫ですよ」

左手でジーンズの水気を払いながら、右手で軽く手を振って奈緒が笑顔を浮かべると、女は安堵したように息を吐いた。――ふつと和らいだ相手の表情を見て真っ先に、奈緒の視線は左の目尻のすぐ下にあるほくろに注がれる。

「本当にごめんなさい」

女が屈み込んで、辺りに落ちた物を拾い始めた。あっと小さく声を上げて、奈緒も慌ててそれに倣う。

「―――すいません。ありがとうございます」

「いいの、いいの。私がぶつかったのが悪いんだから」

そう言って再度謝ると、女は人混みの中へ消えていった。

なんとなくその後ろ姿を見送っていた奈緒は、レジの店員の声で我に返る。

「——お次のお客様どうぞ」

「あ、はい」

急いでかごを持ち上げて、台に乗せた。

午後7時。

「綺麗な人だったなあ」

鏡を覗き込みながら、奈緒はぼそっと呟きを落とした。

思い出すのは、スーパ―での一件。——大して歳が変わらないであろう女の姿だった。

元々のつくりがいいのだろう。彫りの深い顔立ちに長い睫毛が印象的で——念入りに施したわけでもない薄化粧なのだが、困ったように目尻を下げる表情やはにかんだ笑みは、同性の奈緒が羨むような美しさだった。

「泣きぼくろがセクシーだった」

奈緒は左頬に手を当てた。

鏡に映る自分の表情——ややつり気味の目元は勝ち気そうで、その大きさからか、奈緒には全体の表情が幼く見えた——をじいっと見つめて、ため息をつく。

「メイクしてみようかな……」

奈緒は以前、施設で共に育った同性の影響で化粧に挑戦したことがあった。

だが、姉と慕っていた彼女が奈緒に教えた化粧は、瞼全体にシャドーを入れてアイラインで目元を囲み、つけ睫毛とマスカラで睫毛を倍の長さに伸ばす。目頭には——という込み入ったやり方だった。

さすがにそこまでやるつもりがなかった奈緒は、他にもいろいろと試して、結局、眉毛を整えてビューラーで睫毛をあげることしかやっていない。

「——もう！」

がばつとテーブルに突っ伏して、奈緒は呟いた。

「……頑張ろっかなあ」

その瞬間、脳裏をよぎったのは馨の姿——。

「なんで、馨が出てくるのよお……」

しかめ面を作った奈緒の頬が、赤く染まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5520d/>

悲劇の神妻

2010年12月14日16時10分発行